

もうよか、食べきらん

二丈深江 淀川天神社で「百々手祭り」

山盛りのご飯をひたすら食べ続ける、おもしろおかしい「百々手祭り」が1月22日、二丈深江の淀川天神社で行われました。

五穀豊穡を願い、およそ300年前から始まった伝統行事で、高膳には、ご飯と一汁三菜が用意され、1杯目のご飯を食べ終わると2杯目からは山盛りのご飯がよそわれます。

参加者たちは「もういらん」と苦笑しながらも、懸命に口に運んでいました。



次々によそわれるご飯を必死に食べる参加者たち

感謝の気持ちで礼儀作法を学ぶ

一貴山小学校6年生が「お膳座り」を体験

正しい礼儀作法を学ぶことを目的に1月25日、一貴山公民館で恒例の「お膳座り」が行われました。

二丈在住の佐々木花仙さんから日本礼道小笠原流煎茶社中の講師を招き、一貴山小学校6年生の子どもたちが作法の基礎を学びました。慣れない動きに戸惑い、「正座で足がしびれた」と苦笑いしながらも、礼儀作法が、食や食事を作ってくれた方へ謝意・敬意を表することにつながることを身をもって学習し、「これからの生活の中で生かしたい」と語っていました。



おもてなしに対して、感謝の気持ちとマナーを学ぶ児童たち

交通不便地域に新たな市民の「足」

福吉校区で自主運行バスが運行開始

バス路線が整備されていない交通不便地域の利便性を高めようと、福吉校区で1月24日から自主運行バスの運行が始まりました。バスの運行は、地域と市との協働で実施。週3日、1日2往復し、運賃は無料です。

利用予定の高齢者は「月に何度か、通院や買い物に利用したい」と運行開始を歓迎していました。

今年度、福吉校区をモデル地域として運行し、利用状況を見ながら市民の身近なバスへと改善し、来年度以降は他の地域にも拡大していく予定です。



地域密着型のバスをめざす「ふくよし号」

板垣養鶏場(糸島市末永)
板垣 愨也さん(64歳/左)
成一郎さん(長男、30歳/右)

最高の「卵」と「たい肥」を提供できるように
これからも挑戦し続けます



愨也さんと成一郎さんが心を込めて作った「特卵」とたい肥。写真は養鶏場内にて

糸島人
Itoshima Bito
vol. 14

「つや」とりのこの玉子」の愛らしい名称で、市内の直売所に卵を出荷する生産農家がある。糸島市末永で、40年以上も養鶏業を続けている板垣養鶏場だ。昨年11月に福岡県で開催された「第7回ふくおか良質堆肥コンクール」で見事入賞を果たした。「卵」と「たい肥」。疑問に思う人も多いかもしれないが、実は家畜業とたい肥(家畜から排出される糞)には切っても切り離せない切実な問題がある。



鶏の飼料には、トウガラシや備長炭などを配合し、栄養価が高く、臭みのない卵を実現。鶏糞にもたくさんの養分が含まれている

板垣養鶏場を先代から引き継ぎ営んでいる板垣愨也さんと妻の典子さんは、創業当初より、家畜から毎日排出される10トンもの糞に頭を悩ませていた。産業廃棄物と

「たい肥を作る上で、糞の中に存在する窒素・リン・カリウムの配分率が均等になるように寝かせることが重要で、少しでもバランスが崩れると、同じ量のたい肥を使っても野菜や植物の育ち具合に大きく影響を及ぼすそうだ。「現在は、配分率がほぼ一定のたい肥を提供できるようにになりましたが、これまでは、

利用する考え方は当然のこととで、問題は使えるたい肥を作れるかどうかなんです」と愨也さんは語る。

「たい肥を作る上で、糞の中に存在する窒素・リン・カリウムの配分率が均等になるように寝かせることが重要で、少しでもバランスが崩れると、同じ量のたい肥を使っても野菜や植物の育ち具合に大きく影響を及ぼすそうだ。「現在は、配分率がほぼ一定のたい肥を提供できるようにになりましたが、これまでは、

改善を求めるたくさんの方の意見が寄せられました」と昔の苦労を語る。

今回のコンクールで入賞を果たしたものの、今後より多くの人が使いやすいたい肥をめざし、色や形の改良にも力を入れていくという。

愨也さんは「私はもう第一線を退きました。今後は息子にしっかりと後を継いでもらい、頑張ってもらいたい」と成一郎さんに期待を寄せている。

たい肥はファームパーク伊都国で1袋(15キロ)250円で販売中とのこと。板垣さん親子一押し「特卵」も各直売所で販売している。



表彰を受ける成一郎さん